

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531133

研究課題名(和文)「読解力」育成材としての絵本の有効性に関する基礎的研究

研究課題名(英文)A Study on Efficacy of Picture Books as resources for Developing Reading Literacy

研究代表者

山元 隆春(Takaharu, Yamamoto)

広島大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：90210533

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：(1)「読解力」(Reading Literacy)育成のために、絵のない本や文章と比べて、絵本の場合、読みの過程を読者がメタ認知しやすいということがわかった。読みの過程を学習者に意識化させることで「読解力」育成の基礎がつけられる。(2)主として米国の文献の調査によって、「読解力」の根幹となる、「理解するための方法」の学習においても、絵本を教材として使用することが効果的であることが明らかになった。(3)読み書きカリキュラムで、絵本が、多モードのメディアとして大きな役割を果たしうること、そしてその有効性を生かすためにはワークショップ型の授業展開をさらに工夫する必要があるという提言を行った。

研究成果の概要(英文)：There are 3 findings from this 3 years study as follows,
(1) Student could be more meta-cognitive on their reading process when using picture books as resource for developing reading literacy. (2) The result of analyzing many proficient readers researches show us that it would be very effective to use picture books as teaching resources in Language Arts classrooms for developing any comprehension strategies. (3) Picture books could take very important role in literacy curriculum as multimodal texts for developing reading and writing literacy. For elucidating efficacy of picture books, we should elaborate and develop workshop-model learning instead of traditional lessons.

研究分野：国語教育学

キーワード：絵本 メタ認知 ワークショップ 読解力

1. 研究開始当初の背景

国語教育学におけるこの方面の研究は、近年光が当てられてきた領域である。英米においては、1990年代から展開されてきたノーデルマンやニコラエヴァとスコットらの絵本の理論的研究(ニコラエヴァとスコット、川端・南訳(2010))などをふまえながら、ローゼンブラットらの「読者反応理論」(Rosenblatt, 1938/1995, 1978:Beach, 1993(山元訳, 1999))をふまえた、何人かの研究者の手によって少しずつ研究が展開されている。キーファアの『絵本の可能性』(Kiefer, 1995)では、欧米の代表的な絵本の技法とそれに対する反応の実際が論じられていた。視覚的な知識と経験とが、鑑賞力や解釈力の伸長に貢献するものであることがそこでは論じられていた。この方面の研究はその後、英国のスタイルズ(谷本訳 2002)、米国のサイプやパンタレオら(Sipe, 2008: Pantaleo, 2008)によって担われ、授業における文学的理解を進化させたり、「読解力」を育成するための教材としての現代絵本の価値が掘り下げられている。また、現代絵本と境を接するジャンルであるグラフィックノベルについても、その国語教育に果たす役割を掘り下げたものにカーターらの研究があり(Carter, 2007)、これについても山元(2008)が詳しい紹介と考察を行っている。また現代の絵本研究についてはコロマーら(Colomer et al., 2010)によって英語圏を中心にした新しい絵本研究の概観がなされており、現代絵本についての現代文学理論を用いた読解の可能性も示唆されている。本研究はこれらを授業理論の方向に発展させるものである。

2. 研究の目的

本研究は、わが国児童・生徒の「読解力」育成のための教材として絵本(主に現代絵本)がどのような有効性を持つのかということ、現代の絵本研究及び絵本の受容に関する研究を博捜し、主に「読者反応理論」の立場から理論的・実証的に明らかにして、「読むこと」の学習指導のための教材開発と授業づくりに貢献することを目的としている。

3. 研究の方法

申請者はこれまで、「読解力」を育てる基盤となる「グループディスカッション」で交わされる反応のやりとりの分析にもとづいた研究を進め(山元, 2006)、「読解力」育成のための足場づくりに関する基礎的な研究を行い、その足場としての現代絵本の重要性を考察してきた(山元, 2008他)。山元(2011)では英米における現代絵本の教育学的、読者反応理論的研究をふまえ、絵本『白黒』(マコーレイ)を検討の主たる対象としながらその国語教育的な意義を掘り下げた。このような申請者自身の従来の研究の成果をさらに統合し、現代絵本を一つの焦点として、「読者反応理論」の知見をふまえつつ、その「読

解力」育成材としての有効性を明らかにして研究が、わが国における学校カリキュラムの改革の焦点の一つである、言語活動の充実という課題に取り組むために重要であると考えた。

そこで、国内外における国語教育学における絵本研究や読者反応研究文献の検討をもとに、絵本の受容に関する理論的・仮説的枠組みや絵本が「読解力」の育成にどのように関与・貢献するのかといことについての仮説を構築した。その理論的・仮説的枠組みと仮説を調査や授業実験をもとにして検討し、「読解力」を育成する素材としての絵本の有効性を十分に指摘して、「読解力」をはぐくむ授業と言語活動の充実のための方策に関する提言を行った。

4. 研究成果

平成24年度は、国内外の国語教育学における絵本研究関連の文献(米谷, 2005ほか)や、絵本研究文献及び読者反応理論関係の文献をもとにして、主として絵本に関する読者反応研究・受容研究のなかで展開されている、絵本に関する子どもの反応の提示と、その分析を克明に訳出・分析しながら、絵本の受容に関する理論的・仮説的枠組みを構築した。

平成25年度は、調査及び授業実験の成果をもとにしながら、「読解力」育成材としての絵本の有効性を探った。また、有元(2010)、カルキンス(吉田・小坂訳, 2010)、吉田(2010)のような、絵本を素材としたブッククラブやリーディング・ワークショップに関する授業書を参照しながら、教材開発や授業づくりの提案を行い、「読解力」育成材としての絵本の有効性を十分に指摘し、「読解力」をはぐくむ授業や言語活動の充実のための方策に関する提言を行った。

平成26年度は、研究のまとめとして、わが国児童・生徒の「読解力」(Reading Literacy)育成のための教材として絵本(とくに現代絵本)がどのような有効性を持つのかということを検討し、次のような成果を得た。

(1) 現代社会に必要な「読解力」(Reading Literacy)育成のために考えていかななくてはならない諸課題を必要な理論、教材・学習材論、指導論それぞれの角度から多角的に議論し、単著としてまとめた。

(2) 米国の最新の文献をくわしく調べながら、「読解力」の根幹となる、「理解する」(わかる)ための方法とそれを使った成果に関する研究を行い、全国学会等で発表した。それらの研究をもとにしてA5版113頁の報告書をまとめた。

(3) 「読解力」育成材としての絵本の有効性を生かす指導方法論については、日本の中学校国語科における実践的な研究を行い、日本の国語科において活用可能な新しいアプローチについての提案を行った。さらに、当該領域で、国際的に評価の高い「理解するた

めの方法」(comprehension strategies)指導に関する文献を翻訳・出版した。「理解するための方法」指導を進める上での課題をより明確にした。

本研究における成果を大きくまとめると次の通りになる。

(1) 現代社会に必要な「読解力」(Reading Literacy)育成のために、現代絵本はその教材として大きな役割を果たすことが明らかになった。絵のない本や文章と比べて、絵本の場合、読みの過程を読者がメタ認知しやすいということがわかった。絵本を使って「設定」「視点」「筋」「登場人物の造型」「テーマ」「伏線」「比喻表現」等の文学的要素を学習者に意識化させることによって、「読解力」育成の基礎がつけられる。

(2) 主として米国の文献の調査によって、「読解力」の根幹となる、「理解する」(わかる)ための方法(comprehension strategies)の学習においても、絵本を教材として使用することが効果的であることが明らかになった。研究代表者自身が翻訳に携わった理解指導の重要な文献(キーン著『理解するってどういうこと?』)においても、「理解するための方法」指導の教材として多数の現代絵本が活用されていた。

(3) 読み書きの学習のためのカリキュラム構築においても、絵本は、多モードのメディアとして大きな役割を果たしうること、そしてその有効性を生かすためにはワークショップ型の授業展開をさらに工夫する必要あるという提言を行った。

研究全体を通して、より多くの児童・生徒に「理解の仕方」を学ぶための教材としての現代絵本の持つ有効性を明らかにすることができた。研究代表者が関与する、教員や図書館教育に関心を持つ人々の研修等においても、本研究の成果を生かしたプログラムを実施している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9件)

「「理解する」ことの学習のためにどのような授業が必要か - ジョアンナ・M・ジミー著『理解するための方法を絵本で教える』の場合 - 」, 山元隆春, 『国語教育研究』, 第 56号, pp.206-218, 2015.3.

「中学校国語科におけるリテラチャー・サークル実践の展開: 「少年の日の思い出」を扱う単元の場合」, 山元隆春, 居川あゆ子, 『学校教育実践学研究』, 第 21 巻, pp.35-45, 2015.3.

「「読解力」育成に果たす絵本の役割: 現代絵本を使って「文学的要素」を教える試み」, 山元隆春, 『論叢国語教育学』, 復刊 5 号(通巻 9 号), pp.71-89, 2014.

「読解力」育成に果たす絵本の役割 現代

絵本を使って「文学的要素」を教える試み」
山元隆春, 『論争国語教育学』, 復刊 5 号(通巻 9 号), pp.71-89, 2014.7

「米国における理解方略指導の具体的展開: Hervey & Goudvis 編『解釈の道具箱』における「意味を推論する」授業の場合」, 山元隆春, 『論叢国語教育学』, 復刊 4 号(通巻 8 号), pp.47-63, 2013.

「読むことの「授業」はなぜ必要か」, 山元隆春, 『学校教育』, 1153 号, pp.6-11, 2013.

「ブッククラブとリテラチャー・サークルの可能性」, 山元隆春, 『月刊国語教育研究』, 497 号, pp.28-31, 2013.

「リテラチャー・サークルによる読書活動の開拓: 中学校国語科の場合」, 山元隆春・居川あゆ子, 『学校教育実践学研究』, 19 号, pp.89-99, 2013.

「実践を育む「対話者」との出会い」, 山元隆春, 『国語科教育』, 71, pp.105-110, 2012.

〔学会発表〕(計 5 件)

「読み書きカリキュラムにおける絵本の役割 - Frank Serafini(2014)Reading the Visual - を手がかりにして」, 山元隆春, 第 127 回全国大学国語教育学会, 2014.11.8、筑波大学(茨城県つくば市)

「読解力」育成材としての絵本の有効性 Janet Evans 編(2009)Talking Beyond the Page を手がかりとして、山元隆春, 第 126 回全国大学国語教育学会, 2014.5.18、ウインク愛知(愛知県名古屋市)

絵本を用いた理解方略指導の実際: 米国の事例を中心として, 山元隆春, 第 124 回全国大学国語教育学会, 2013.5.18, 弘前大学(青森県弘前市)

「読解力」育成に果たす絵本の役割: 米国における実践的提案を手がかりにして, 山元隆春, 第 123 回全国大学国語教育学会, 2012.10.27, 富山大学(富山県富山市)

理解方略指導の具体的展開: The Comprehension Toolkit を手がかりにして, 山元隆春, 第 122 回全国大学国語教育学会, 2012.5.26, 筑波大学(茨城県つくば市)

〔図書〕(計 4 件)

「理解するってどういうこと? - 「わかる」ための方法と「わかる」ことで得られる宝物 - 』共訳, エリン・オリヴァー・キーン(山元隆春, 吉田新一郎訳), 新曜社, pp.1-422, 2014.10.

『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』山元隆春, 単著, 溪水社, pp.1-335, 2014.4.

『言語コミュニケーション能力を育てる』, 位藤紀美子編, 山元隆春, 山元悦子, 住田勝他著, 世界思想社, pp.1-320, 2014.2.

『本を読んで語り合うリテラチャー・サークル実践入門』, ジェニ・デイ他(山元隆春訳), 溪水社, pp.1-191, 2013.11.

〔産業財産権〕
出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕
ホームページ等
なし

6．研究組織

(1)研究代表者

山元隆春(YAMAMOTO, Takaharu) 広島
大学・大学院教育学研究科教授

研究者番号：90210533